

チョンシー・ライトについて

——プラグマティズムとダーウィニズム再考——

嶋田 厚

チョンシー・ライト (Channcy Wright 1830～1875) の名を私が初めて目にしたのは、鶴見俊輔の『アメリカ哲学』(一九五〇、世界評論社)のなかである。周知のように、これはG・H・ミード論なども加えられた形で、一九七六年に講談社学術文庫として復刊されているが、その初版は若き鶴見が当時の思想界に対する革新の意気に燃えて、文体さえも表音式假名遣いによった、内容ともどもまことに異彩を放った書物である。全編が、プラグマティズムの紹介と撮取に当てられ、特にそのバースペクティヴの中心に、本来の名付親であったチャールス・バースを置いたところに独自の面目があった。記号論の開祖として、今でこそ名高いバースではあるが、多分、日本の読書界が初めてその名を識ったのは、殆どがこの書物をおしてだったと思われる。

私自身もその例外ではなく、そうした恩恵を受けたひとりであるが、初見当時に、僅かながらも多少関心を寄せていたウィリアム・ジェームズの関連で、妙に気になった人物が、実は、この鶴見の紹介以降も日本では多分誰ひとり触れた人はないと思われるチョンシー・ライトだったのである。

鶴見は冒頭の第一章を、「プラグマティズムの起源」に当て、先ず、その温床となった「形而上学クラブ」とそのメンバーを紹介している。そこで「わたしが、形而上学クラブ」と稱する小規模なクラブを発足させたとき、ライトがその最強力なメンバーで、つぎがこの私で、さらに当時は、フランク・アボット、ウィリアム・ジェームズなども参加していました」という、ある夫人宛のバースの書簡を援用してライトに言及し、節を改めて「指南役」という見出しの下に、四頁弱を使って、グループの最年長者であり、間もなく、四五才で死んだこの科学哲学者について

解説している。

このクラブにおいて「合唱隊の指導者」の役割りを勤め、また、専属の「拳闘師範」として若者達に議論の稽古をつけていたと言われるライトの生涯について挿話的に触れた後で、その思想を四つの側面でもとめている。哲学論、宇宙論、道徳論、そして認識論であり、とりわけ、この最後の認識論のコメントとして、鶴見は次のような印象深い指摘をして、この項をしめくくっていた。

「ライトは、動物の知能が人間の知能に移ってゆく過程を再現しようと試み、しかもこれを両者の記号の使い方の面で捉えようとした。この意味でライトは、プラグマティズムの記号論の先駆者だった。また彼は、人間の意識の本来の状態において、外部世界と内部世界とが分かれて認識されていないことを主張して、その著書『哲学的議論』の二二二頁に次のごとく書いた。

『かくて、音、色、味、快、不快の感覚ならびに望み、愛、憎しみの感情は、もしそれらの原因にまだ参照されておらず、また感覚あるいは感情として分類されていないならば、どちらの世界にも属していないのである。』この意見が、ジェームズが晩年主張した徹底的経験主義の先駆をなすことは、ケネディによって一九三五年に指摘された。

西田哲学におけるもっとも重大な業績が『善の研究』であり、『善の研究』中のもっとも重要な主張が、真実在は物心未分の境にあるということだと、佐藤信衛その他は説き、さらにこの考えは、西田がジェームズを読むことをとおして把握されたことも西田の青年時代の日記をとおし明かである。西田哲学における最も重大な考えは、チョンシー・ライトに始まり、ウィリアム・ジェームズをとおって、西田幾多郎に流れ入ったものと言える。』（引用は、新版の『アメリカ哲学』（上）による。なお、原典からの引用頁の記述は、初版も改訂版も二二二頁となっているが、誤植であろう。また、文中の傍点は鶴見による。）

その後数年たって、私は、西田以外に、もう一人ジェームズに強い関心を寄せた人物であった夏目漱石を、ジェームズとの関連で取上げる機会を持った。（『漱石の思想』『文学』一九六〇・一一および一九六二・一二）「自分の平生文学上に抱いている意見と、教授の哲学に就いて主張する所の考えが、親しい気脈を通じて彼此相倚る様な気がしたのである点を愉快に思った」と漱石は『思い出す事など』の中で書いている。両者の思考を調べるうちに、私は漱石の述懐が極めて的を得たものである点に強い感銘を覚えたことを思い出す。私がそこに見たものは、ハーバート・スペンサーから脱出し、それに対決するジェームズの軌跡と、自然主義に対立していく漱石の思想的営為との間の鮮やかな類似であった。鶴見の言

い方になぞらえるならば、漱石文学における最も重大な考えは、チョンシー・ライトに始まり、ウィリアム・ジェームズをとって、夏目漱石にもまた流れ入ったものと言うべきかも知れない。

よく言われるように、プラグマティズムはダーウィンの進化論を最も深く受けとめながら、同時に、流行の社会的ダーウィニズム、H・スペンサーに代表される社会進化論に対しては、いち早く批判、攻撃した思想運動であった。アメリカにおける社会的ダーウィニズムについての秀れた著作である『アメリカの社会進化思想』（原著一九四四、訳書一九七三、研究社）において、R・ホフスタッターは述べている。「プラグマティズムの哲学者は哲学を、完結された形而上体系の構築ということから、実験的な知識利用法の研究へと方向転換した。プラグマティズムは、人間の道具としての思想の研究を強調したという意味で、進化論生物学を人間思想に応用したものである。主に基本的なダーウィン思想の概念——生物、環境、適応——を利用し、自然主義哲学の用語を利用しながらも、プラグマティズムの伝統はスペンサー思想とは全く違った知的、実際的な問題を持っていた。」

これは、「プラグマティズムの時代」と題された第七章からの引用であるが、主として当時としてはよく知られたジェームズとデューイについてそれぞれに論評したこの章の第一節を「ジェームズが人間主義的な哲学にまで拡大したのはこの二人の実験的な批判であり、デューイの手によって社会理論ともなり一つの社会的な勢力ともなったのも、それと関連した哲学思想であった。」としてわざわざ、「この二人」すなわち、源流でもあり、先行者でもあるライトとパースの二人に当てている。そこで彼は、「ライトはおそらく自然主義の視点から全面的なスペンサー批判を発表した最初のアメリカ思想家であった。」と断じ、スペンサーは究極の真理を問題にしているように見せかけながら、実は、無用な抽象概念に対する間違った研究を行なったと非難するライトの「ハーバート・スペンサーの哲学」（一八六五）、から次の文章を引いている。

「科学において抽象的な原理の展開を正当化するものは、自然に関するわれわれの具体的な知識を拡張する上で、それがどれだけ役立ちうるかということだけである。数学的な力学や微積分学が基づいている観念、自然史の形態学的観念や、科学の諸理論などは、そうした働く観念、——単に真理の梗概ではなく、真理のファインダーである観念なのだ。」（"Philosophical Discussion" P. 56）

さらにホフスタッターはこの章の補注に、「パースがチョンシー・ライトの影響を受けてプラグマティズムの原理を形成していったことはほとんど疑う余地がない。」というモリス・コーエンの重要な指摘を引いている。この評言は、パースが死去した後で最初の書物として編纂された

「偶然、愛、論理」の編者であったコーエンが、その序論で述べたものである。(原著、一九二三、訳書一九八二、三一書房) コーエンはこれに続いて、「数学、物理学、植物学上の創造的科学的仕事に精通していたライトは、ミルとベインの研究を介して、科学的方法の特徴を反省するにいたった。そしてその反省から彼は、スペンサーらにみられる、世界像ないし世界神話を構成するための通俗科学的素材の使用と、ニュートンなどにみられる、われわれの現象認識を拡大する手段としての法則の科学的使用とを区別するにいたった。ニュートンの貢献を科学的にしているのは、太陽系にかんする既知のいっさいの事実を演繹し、同時に、それなしには思いもつかぬような、はるかに多くの事実の存在(たとえば、海王星の存在)を予想、予言できるような数学的法則を公式化した点にあった。それゆえに、近代数学と自然科学の諸原理は自然を発見する手段であり、科学的法則は事実的真理のたんなる梗概というよりむしろその探知機なのだ」とライトは強く主張する。実験科学者をば、一般命題を新たな実験的真理を獲得するための処方箋に翻訳する者として捉える。この考えがパースのプラグマティズムの出発点をなしている。」とコメントした。さらにコーエンは、これに付言して、「パースの偶然主義はライトの偶然と『宇宙の天気(cosmic weather)』の学説に負っている。ライトのこの学説は、ラブラスに異を唱え、時々刻々自然を認識していく精神は、どれだけ知識を蓄積しても予想することのできない、真に新奇的な現象に遭遇せずにはいられない、と主張している。」と注記している。

実は、こゝまでが、正直なところ、最近までに私がライトについて知っていたことのすべてだった。多少なりともつけ加えれば、H・シュナイダーがその「アメリカ思想史」(1946)の中で触れたところを瞥見したぐらいのものであった。ところが、昨年になってたまたま、エドワード・マッデンの「ジョンシー・ライトとプラグマティズムの基礎」という研究書(Edward H. Madden, "Chauncy Wright and the Foundations of Pragmatism" Univ. of Washington Press 1963)と、同時にライトの遺著『哲学的議論』の復刻版("Philosophical Discussions" Burt Franklin, 1971, 初版は一八七七)を入手した。つまり、漸くにして、始めて実物に出遭うことができたというわけである。マッデンという人は、すでにライトに関して数本の本ノグラフィーを書いている。その集成が、上記の書物となったのであろう。そのほかに、未見であるが、ライトの死後間もなく親友だったチャールズ・E・ノートンによって編まれた遺著とは別に、ライトの哲学論文集を新たに編集している。("The Philosophical Writings of Chauncy Wright, Representative Selection" Liberal Arts Press, 1958)この新編集の理由として、ライトの遺著は殆んど書評の形で書かれたものをそのまゝ集めたものであって、今日の眼からすればあまりに枝葉にまつわる部分が多く、ライト独自の思想

を見出すことが困難なため、その救済を図ろうとして行ったものだとは彼は断っている。

マッデンの指摘どおり、確かにライトの遺著は読みやすい本ではない。まして、一九世紀後半のアメリカ思想史について、まったく素人の域を出ない私にとって、マッデンのガイドがなければ、とてもテキストに踏みこむことさえ難かしい。マッデンは、これまでに触れてきたライトに関するすべての論評を押さえた上で、とくに、ジェームズおよびパースとの立入った比較研究を試みており、従来の定説を批判的に深化させている。たとえば、パースの偶然主義はライトの「宇宙の天気」説に負うていると言われてきたが、両者の「偶然」の概念はむしろ全く対立関係にあるとマッデンは言う。一般に影響といわれる過程のなかには、ネガティブな影響、すなわち反発という形を含む場合もある。ジェームズは明らかにライトに強く動かされたが、しかし、ライトの抱く不可知論には反発し、ある意味ではそれとの相克の中で、彼の「信ぜんとする意志」の考えを築き上げたと見ることもできる。「形而上学クラブ」は確かにプラグマティズムの温床であったけれども、ボクシングの師範も、稽古をつけられた若いボクサーたちも、それぞれ独自の資質とモティーフを持っていた。マッデンの筆は、この辺りの機微に触れて書き進めているが、残念ながら今の私にそれを細かく検討するだけの準備もないし、余裕もない。

とは言え、この二冊の書物に接したことで、是非この機会に書き留めて置きたいと思った一つの発見ないし感想が、私の中に生じたことは事実である。以下にそれを述べてみる。

先に引いたとおり、ホフスタターはライトを指して「全面的なスペンサー批判を発表した最初のアメリカ思想家であった」と呼んだ。この発言に間違いはないが、ライトの思想史上の位置を明示するには、むしろ、「全面的にダーウィニズムを、その自然淘汰の理論を含めて承認し、擁護した最初のアメリカ哲学者であった」点を強調すべきであったと思う。もとよりプラグマティズムとダーウィニズムの関係については、これまでもしばしば論及されてきた。デューイが『種の起源』出版五十年を記念して行なった講演「ダーウィンの哲学へ影響」は、『種の起源』という題目そのものの含意に注目を促すことから始めている。「種」というラテン語の由来はギリシャの「エイドス」に発すると述べ、二千年間西欧文明で信じられてきた「永遠で不可変のエイドス」にも起源があるということを、すなわち、それもまた変わるものであるということの事実上の宣言だとして、巧みにその革命的な意義を説いたこの講演は（後に同名の論文集の冒頭に活字となった）、いわばプラグマティズムから行なわれた公式のダーウィン評価とも言えるものである。しかし、この講演が行なわれたのは一九〇九年、プラグマティズムの陣営への移行以前には

世紀末ぎりぎりまで頑固なヘーゲリアンであったデュイも、すでに五〇才の成熟期を迎えていた。つまり、『種の起源』の衝撃をリアルタイムで受けとめたのは、誰にもましてチョンシー・ライトだったのである。

マッデンはその伝記に触れた部分で書いている。「一八六〇年に、チョンシーはアメリカ芸術・科学アカデミーのフェローに選ばれた。そして、その年、ケンブリッジにあった女子学生のためのルイ・アガシの学校で、自然哲学ないし科学を教えはじめた。この時、皮肉なことに、ライトは、前年に出現してセンセーションを起こしたダーウィンの『種の起源』をはじめて読んだ。彼はダーウィンの進化論の命題ばかりでなく——これまで見てきたように、彼はすでにそうする準備ができていた——その説明としての自然淘汰の理論をも受け入れた。彼がアガシとともに永く留まっていられないことは明らかだった。科学と啓示宗教との間の厳しい葛藤、そして科学自体の内部における葛藤が、アガシとダーウィン主義者の両極で開始されだし、チョンシーは、自ら賭けた賽の側を選んだ。」

ダーウィンの進化論を奉じて、なおキリスト者たりうるのか？ この二〇年ほどの間にアメリカの思想界に生じた混乱を、私たちが真底から理解することは恐らく困難だろう。当時最大の自然史家であり、同時にアメリカ文化界の著名な名士でもあったルイ・アガシは、後に日本に初めて進化論を導入したE・S・モースら多くの弟子たちの離反にも関わらず、終生、断乎としてダーウィンを拒んだ人物である。知識人のすべてが、ダーウィンとアガシの両極の間で何らかの妥協点を求めて動揺した。例えば、「形而上学クラブ」に時折顔を見せたジョン・フィスクは、やがて進化の背後に神を見る口当りのよい通俗進化論を唱えて名声を博した。さらにダーウィンを悩ませたのは、自然淘汰の共同発見者であるA・R・ウォレスさえが、その原理は、特別な創造物である人間精神には適用できないと言いだしたことであった。端倪できないそのエッセイの中でダーウィンの「長いためらい」について興味深い指摘を行った自然史家のS・J・グールドは、ダーウィンが自説の発表を二〇年も遅らせたのは、十分な証拠の必要と同時に恐怖心という消極的な要素があったに違いないと断じている。進化の過程は単に無方向の変異と自然淘汰だけであるという自分の信条が、どれほど異端であり、破壊的なものであるかを、ダーウィンはよく知っており、だからこそ、彼はその発表に慎重であり、また、その表現にも慎重を極めたのだ。「彼がその信条を洩らしたのは、もうそれ以上かくすことができなくなったときのことです、

『人間の由来』(1871)と『人間及び動物の表情』(1872)においてであった。」とグールドは言っている。(註)

ライトは、初めて『種の起源』に接して以来、こうした進化論をめぐる喧噪の中で、一貫してダーウィンの観方を離れなかった例外的な——

特に生物学者以外での——思想家であった。そもそも『種の起源』自体、この分野での専門家以外には、必ずしも読み易い本ではない。論争の大方が、データの厳密な検証もない、いわば神学論争の枠を出なかったのは当然であった。その中で、ライトが専門家による議論をずっとフォローしつづけたのは、彼の自然科学に対する関心と学識の深さを物語る。先にも見たように、スペンサーに対しては呵責のない難雜を隠さなかった彼が、ダーウィンに対しては終始忠実な態度を変えなかったのは、ためらいの陰にかくされたダーウィンの恐るべき洞察に深く共感するところがあったと見なければならぬ。

一八六〇年代のライトにあって、他の科学・哲学その他、多岐にわたるトピックスの中の一角に過ぎなかったダーウィニズムへの関説が、集中的に展開されたのは、彼の生涯の最後の五年間である一八七〇年代に入ってからであった。「自然淘汰の限界」(1860)「種の発生」(1871)「自然淘汰による進化」(1872)そして、「自意識の進化」(1873)。「北米評論」に矢つぎばやに書かれたこれらの論文は、その最初がウォラスの議論に対して、そして第二と第三は、自然淘汰の理論に否定的な見解を示した動物学者のジョージ・マイヴァートに対して、ダーウィンを擁護したものであった。そして、この時、批判のために使った武器は、生物学的事実というより、彼らの考え方に対する哲学的な分析であった。

マッデンの報告によれば、「ダーウィン自身、進化をめぐる大議論に対するこの哲学的貢献にいたく感銘した。彼は自分の『人間の由来』にこの最初の論文が役立つことを認め、自分の費用で二番目の論文——『種の発生』——を小冊子としてリプリントし、イギリスで配った。」さらに四番目の論文については、「『自意識の進化』は彼の最も持続的で丹念な哲学的労作であり、それは、言語の進化との関連で、ある事物がいつ人間の意志によって成し遂げられたと適切に言われうるかを決定する問題に、彼の分析力を傾けるようにというダーウィンの示唆によって書かれた。」ものであったという。

この論文が右のようなダーウィンの態度への直接の答えとなったとは言えないまでも、少くともダーウィンが心中抱いていたもっと広汎な問題、すなわち、人間と他の動物との間のギャップに橋を架けるという困難な課題に答えようとする重要な試みであったことには変わりはない。それは、人間の意識は「特別な創造物である」とする広く、永く、そして深く滲透した通念に対して、何とか突破口を見出そうとする困難な試みであった。「自意識のいかなる行為も、どんな要素であろうとも、人間の自意識が行なう前に動物の世界で実現されたことはないだろう。とは言え、その行為は、既存の力ないしは原因の中に潜在的に含まれていたかも知れない。」と慎重に述べた上で展開された議論の骨子を、マッデンは、

次のように纏めている。

「ライトは先ず、科学的（反省的）思考と省略三段論法的推論を区別する。人間の心に特有で他の動物の心とは違う前者は、特定の事物を明らかな一般原理ないしは大前提の下にもってくる。後者は小前提から結論へ、大前提を飛ばして行なう。その場合、もし意識的に定式化すれば大前提となるはずの経験的データは、明確さの度合いは違え、小前提から結論を示唆する上で因果的に作用を及ぼす。省略三段論法的推論は、天氣の予知や多くの動物たちの方位決定におけるように、サインと類似性からの推理で展開される。この推理においては、サインは、記号と記号化された事物との間の関係認知のない出来事の先触れに過ぎない。言いかえれば、サインの意味論的能力は認められていない。しかし、科学的推理においては、サインはそれ自体反省的注意の対象である。一つのサインは『それが記号化されるもの、それが過去において記号化されたもの、ならびにそれが将来記号化されるだろうものへの一般的関係において認知される。』

外部知覚と同様、内部イメージも、推論の中でサインとして働く。それを認知することは科学的知識を達成する上で決定的なステップである。「犬」とか「木」とかの一般的な名稱で呼び起こされるヴィジュアル・イメージと同様、特定の事物や一種の関係のすべてを表す『表象的想像』としての内的イメージは、漠然として、強さに欠けていても、思考においてはサインもしくは指示的要素として有効に働く。死すべきもののサインとしての『人間』のイメージは、この人の人間性のサインから彼はいつかは死ぬだろうという予期を導き出す。しかし、省略三段論法的推理においては、内的イメージ『人間』は、その弱い性質のゆえに、意識から抜け落ち、その現前のサインは、直接、死の予想に導かれてしまう。内的サインは、記号化される事物への過度の注意の中で見失われる。しかし、記憶力の範囲の拡大とそれに対応するその印象の鮮やかさの増大とによって、（別な方向への有効な変異と適当な自然淘汰によって確かなものとなって）人は、内的および現前するサインのどちらにも注意を固定させることができ、結果として、大前提としての内的サインの働きだけでなく、同じ事物の同時に起る内的および外的な示唆に気づくようになる。すなわち、例えば、内的イメージ『人間』と『この人間』についての知覚が、ともに『死すべきもの』を記号化するということが実現される。」

ここまで要約した後で、締めくくりにマッデンは、ライトが試みたギリギリの解答を引いている。

「そして、思考と事物との対照は、少くとも、両者が同時に起るサインであるかも知れないということを仄めかすその力の中で、初めて、知覚

されるようになるだろう。このことが明らかに、自意識という人間的形式の芽生えを育んだのであろう。」

ライトにとって、最も長い、もっとも自説の展開にあてたこの重要な論文の中心的な論点は、ほぼこれまでのようであるが、この議論の展開の中で、その文脈から派生する問題は当然ながら広い範囲に及んでいる。その一つが、「主観と客観の区別は、多くの形而上学者が存在すると思いついてはいる直観的な区別に代わって、観察と分析を通じての分類となっていく。」という主張であり、この重要な命題が、意識の問題を動物の記号活動として扱えようとしたライトのバースペクティブと深く関連したものであることは、これまでに触れたところからも明かであろう。そして、実は、冒頭に触れたジェームズの徹底的経験論に関連して鶴見が引いたライトの文章は、まさしくこうした文脈における発言だったのである。

マッデンはなおこの論文に関して、バースやとくにジェームズとの精細な比較検討を行っているが、その点までは立ち入らない。むしろ、私の指摘したいのは、この二冊の書物が齎らした一種の感慨にも似た驚きである。すなわち、これまで日本におけるジェームズの徹底的経験主義の受容を考える際、ダーウィニズムとの関連という文脈が、いかに無視され、欠落していたかという点である。私たちは西田の「物心未分の境」をダーウィニズムとつき合わせて考えたことがあったろうか。また、西田自身、ジェームズと、その源流となったチョンシー・ライトの問題意識ないし動機について、思い廻らしたことがあったのだろうか。

一八七〇年前後、ダーウィンが抱えていた問題は、そのまゝライトにつながっていた。大西洋を距てて彼らは同じ時代の空気を吸い、そして新しい洞察を共有し、相互に心を通わせていたのである。(マッデンは、一八七三年のダーウィン訪問をライトの生涯のハイライトとして報告している。) しかも、「形而上学クラブ」が生まれ、彼らの知的会話の中からプラグマティズムが形成されていった時期が、正確にこれに同調していたことを考え合わせるとき、私たちはまだまだそこから汲みとり、あるいは再考すべき多くの魅力ある問題にぶつかることになるだろう。

リチャード・ローティはその『プラグマティズムの帰結』の中で、今世紀に起こった哲学上のパラダイム・シフト、すなわち、その言い方によれば、「真理とは実在への対応」という一種の使命観ないし恐迫観念からの解放について語り、そのきっかけとして、プラグマティズム、なかならず、バースの提言を想起している。その議論のすべてに賛成するわけではないが、少くとも、この指摘は好意を持って受けとめたい。しかし、私には、彼のいうパラダイム・シフトの跳躍台は、どうやらバースであるよりも、忘れられた思想家のチョンシー・ライトとその背後にい

たチャールズ・ダーウィンが用意したのではないかと思われる。

註

周知のように、一九七四年以来、二〇年近くにわたって、“This view of Life”の名のものに『ナチュラル・ヒストリー・マガジン』に書き続けられているグールドのエッセイの冒頭が、この「ダーウィンのためらい」についての一文であった。（邦訳『ダーウィン以来』一九八四 早川書房）なお、この一連のシリーズ中の「ガラパゴスのアガシ」には、死の前年に憔悴したアガシが、それでもビーグル号の航跡を辿って、進化論の聖地とも言うべきガラパゴスに赴いたこと、そして、その航海のお膳立てをした人物は、彼の長い友人であり、かつ、チャールズ・バースの父親である合衆国沿岸測量部長官のベンジャミン・バースその人であった、という秘話が語られている。（邦訳『ニワトリの歯』一九八八 早川書房）

ライトの『哲学的議論』とマッデンの研究書を思いも掛けず目にする事が出来たのは、かつての本学の院生、現在は湘南国際短期大学に所属するW・ジェームズZの研究家、良峯徳和君の好意によるものであった。記して謝意に代えたい。

Channcey Wright: His Darwinism and Pragmatism Reconsidered

Atushi SHIMADA

In *his Consequences of Pragmatism* Richard Rorty refers to Charles Peirce's proposal, to which, interestingly enough, he attributes the shift of philosophical paradigm evolved in this century, that is, in his words, the release from a sense of mission or an obsession that "*truth is to correspond with reality*". This article, however, making a further inquiry into Rorty's view, will indicate it was rather the philosophy of Channcey Wright, who was the predecessor of Peirce as well as the leader of '*Metaphysics Club*' but nevertheless "*a forgotten philosopher*", rather than that of Peirce that played the role of the peg to hang the paradigm shift on. C. Wright was the first philosopher to give full support to Darwinism including the theory of natural selection. It was Darwin's view, which considered human mind as not anything God-given but the product of animal evolution, that has enabled the formation and the subsequent development of such a radical approach as assumes that human mind is a '*sign*' action. In this respect, C. Wright, standing on the contact point of Darwinism and Pragmatism, is a very important person, who should not be 'forgotten'.